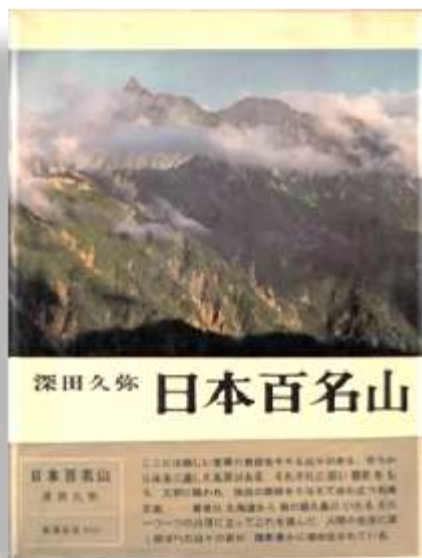


鹿沼の自然・栃木の旅

月報第22号

(2014年3月)



北光クラブ
自然観察クラブ

春の高尾山ハイキング
～東京・小下沢より景信山、高尾山薬王院へ～

日 時：4月6日(日) AM6:00 JR 鹿沼駅集合(解散時刻未定、雨天中止)
(JR 日光駅 6:00 発、JR 鹿沼駅 6:28 発乗車予定)

行 程：日光(6:00)ー鹿沼(6:28)ー(6:41)宇都宮(6:53 湘南新宿ライン逗子行)ー
(7:20)小山(7:24 ホリデー快速富士山 3号河口湖行)ー(9:20)高尾
(9:32 京王バス小仏方面行)＝(9:45)大下…(40分)…小下沢キャンプ場
…(1時間)…景信山…(30分)…小仏峠…(20分)…城山…(45分)…高尾山
…(35分)…リフト山上駅＝リフト山麓駅…京王高尾山ロー(京王線)ー高尾
ー(中央線)ー神田ー上野ー(宇都宮線)ー宇都宮ー(日光線)ー鹿沼ー日光

服 装：防寒着(セーター、ジャンパー等)、帽子、手袋(軍手可)、
軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒(ポット)、レジャーシート、雨具、お手ふき、タオル、
ちり紙、筆記用具、レジ袋、おやつ、お弁当(山上の茶店でも食事ができます)

あると便利なもの：双眼鏡、カメラ、1/25,000 地形図は「与瀬」「八王子」

費 用：参加費おとな 200 円、子ども 100 円、他に交通費として、
JR 青春 18 きっぷができれば 1 日 2300 円(子ども同額)、
(往路) 京王バス 220 円(子ども半額)、
(復路) ケーブルカー運休中のため 2 人乗り観光リフト 480 円
(子ども半額)、京王線 130 円(子ども 70 円)、食事代他、
旅行保険料 340 円(1 回限り、当日集金)

※ 昨年 3 月 31 日の山行に再トライします。詳しくは月報第 11 号(2013 年 3 月)
の案内及び第 12 号の報告もご参照下さい。

問合せ：090-1884-3774 阿部



鹿沼学舎主催

鹿沼・深岩観音参詣と深岩山一周ハイキング

日 時：4月13日(日) AM9:00 見笹霊園、上の駐車場集合(解散はPM1:00頃)

行 程：見笹霊園…広陵 CC 入口…アズマイチゲ群落…岩山山麓…深岩観音入口…

イヌシデ…深岩観音…深岩観音入口…深岩山一周…見笹霊園駐車場

服 装：軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、レジャーシート、雨具、ポット、筆記用具、レジ袋等

必要に応じて：双眼鏡、カメラ、植物図鑑等

会 費：100円(保険料)

北光チャレンジスクール

西大芦・長安寺より羽賀場山、お天気山

日 時：4月20日(日)

※ 詳細はクリーニングハウスあべのHP内、自然観察クラブのページをご覧ください。

問合せ&申込み(共通)：自然観察クラブ 阿部

携帯 090-1884-3774 / FAX 0289-62-3774

携帯✉ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

URL a2b5r7j7@one.bc9.jp

本号の内容

巻頭案内特集	春の高尾山ハイキング～東京・小下沢より景信山、高尾山薬王院へ～ 鹿沼・深岩観音参詣と深岩山一周ハイキング 他……………	2
表紙の本	深田久弥『日本百名山』……………	4
活動報告	両毛線沿線、小さな旅～太平山神社より晃石山を越えて岩舟山へ～…	10
おしらせ	自然観察クラブ 2014年度 行事予定/会費納入のお願い……………	13
読者との往復書簡	阿部良司⇄白坂正治氏……………	14

深田久弥『日本百名山』(昭和39年7月20日・新潮社発行)

44 筑波山 (876m)

筑波山を日本百名山の一つに選んだことに不満な人があるかもしれない。高さ千米にも足りない、こんな通俗的な山を挙げるくらいなら、他にもっと適当な名山がいくらでもあるではないかと。しかし私があえてこの山を推す理由の第一は、その歴史の古いことである。昔、御祖(みおや)の神が所々の神の許を廻った際、日が暮れて富士山へ着いた。宿を求めると、富士の神は物忌のゆえをもって断わった。御祖の神は大へん怒って「今後お前のいる山は夏冬問わず雪や霜に閉じこめてやるぞ」と言い残して東の方へ行くと筑波山があった。その神はあたたかく迎え、食事の用意をして歓待した。御祖の神の喜びはこの上なく「そなたのいる山は日月と共に幸あれ。今後人々が集い登り、飲食の物も豊かに捧げるであろう。それが代々絶ゆることなく、千秋万歳、遊樂の窮まることを知らないであろう」とことほいだ。

これは奈良朝初期に出た『常陸風土記』※¹の中に出ている記事であるが、おそらく常陸の人々の間には、それよりずっと前から語り継がれていた話に違いない。自分たちに近い筑波山を最良するために、富士山を悪く言ったのかも知れない。

すでにその頃から多くの人に登られていたことは、おなじく『常陸風土記』によれば、関東諸国の男女は、春花の咲く頃、秋紅葉の節、相たずさえて登り、山上で御馳走を拵げ、歌をうたって舞い楽しみ、そこで夜を過す者もあった。筑波山へ登ってその会合で男から結婚を申し込まれないような女は、一人前ではないと言われさえた。わが国では宗教登山が最初のように言われるが、筑波山のような大衆の遊樂登山も早くから行われていたのである。

『万葉集』で、山部赤人と並んで富士山の長歌を残した高橋虫麿は、山の好きな人だったとみえて、同集所載の三十六首のうち十五首までが山にかかわりがある。その中で筑波山の歌が三首ある。そのうちの一つ、

草枕 旅の憂を 慰もる 事もあらむと 筑波嶺に
登りて見れば 尾花散る 師付(しつく)の田井に
雁がねも 寒く来鳴きぬ 新治(にひはり)の
鳥羽の淡海(あふみ)も 秋風に 白波立ちぬ
筑波嶺の よけくを見れば 長けき日に 念(おも)ひ積みこし 憂は息(や)みぬ
反歌



筑波嶺の裾廻(すそみ)の田井に秋田川る妹がり遣らむ黄葉(もみじ)手折ら
な

これは秋の歌であるが、虫暦が夏草の茂った暑い頃汗を流して登った歌も
巻第九に出ている。

それ以来今日に至るまで、筑波山を題材にした詩歌は無数にあるだろう。雪
の富士、紫の筑波は、関東の二名山であって、吟詠の対象であったのみなら
ず、江戸に配する好画題でもあった。

スモッグに空を汚された現在でも、東京の高い建物から見える独立した山と
言えば、富士と筑波である。大正の初め、田舎から出てきて本郷向ヶ丘の寄宿
寮へ入った青年が、朝、寮の窓から「おお、富士山が見える!」と叫んだ。それ
は筑波山であったから皆の哄笑を買ったが、しかし常陸の平野の真ん中に立
った筑波は、意想外に高いのである。

私も幾度か眼を疑ったおぼえがある。関東周辺の山から遠くを眺めると、朝
靄の上に鋭く立った峰がある。あんな所にあんな高い山はない筈だが、——と
暫く戸惑った後、それが筑波山であることを悟るのであった。

昼の東北線に乗る時は、いつも私は筑波山を見るのを楽しみにしている。頂
上は二つの峰に分れている。その形が、一番美しく眺められるのは、間々田と
小山のあいだである。小山を過ぎて小金井までのあいだでは、二峰の間が開
きすぎて、さっきのキリッとした緊まりが無くなる。

この二峰並立が筑波山のいい姿であって、昔から男神女神として崇められて
きた。東峰を女体山としてイザナミノ命^{*2}を、西峰を男体山としてイザナギノ命^{*2}
^{*2}を祀った。

歴史が古いだけに名前の謂われにはいろいろの説がある。常磐線の石岡あ

たりから眺めると、二峰が重なって一尖峰をなし鋭く天を刺している所から、アイヌ語の「聳え立つ頭」の意のツクバであるとする説もある。ツクは月のことで、この地に月の神が鎮座していたために、月の神のいます平野の意でツクハという名が生まれた。初めは附近一帯の地名であったが、それが山の名に移された、とも言われている。



※1 『常陸風土記』

風土記は、和銅6(713)年に出された詔により、それぞれの国司が国内の風土についてまとめたものである。この詔には「1 郡・郷の名前に好い字をつけよ／2 郡内の特産品を列挙せよ／3 土地の地味の肥沃な状況を記せ／4 山川原野の名前の由来を記せ／5 土地の伝承を記せ」とあり、全国からこの内容に従って報告書を提出させた。しかし、現存する風土記はわずかに常陸・播磨・出雲・豊後・肥前の5か国のものだけで、それも完全な形で残されているのは出雲だけである。

「常陸国風土記」の成立は養老年間(717～724)とされ、編者には当時常陸国の国司として赴任していた藤原宇合(うまかい)、また協力者として高橋虫麿の存在を考える説が有力である。宇合は大化の改新の中心人物となった中臣鎌足の孫に当たり、父は律令体制を確立させた藤原不比等で、中央の考えた風土記作成の狙いを十分に理解していたはず。さらに奈良時代の漢詩集である「懷風藻」にも詩が採られるなど、当時を代表する文人であることから、「常陸国風土記」の前文に見られる華麗な文章表現も宇合説の根拠となっている。

なお「常陸国風土記」には仏教に関する内容が見られず、全体に神々の記述が多いもの特色の1つ。これに対し、「出雲国風土記」では寺院の記載が多く、際立って対照的。編纂者の意向が強く表われていると思われる。

「茨城歴史辞典」(茨城県立歴史館)より

※2 イザナミ、イザナギ

日本神話で、伊弉冉尊(伊邪那美命・いざなみのみこと・女神)、伊弉諾尊(伊邪那岐命・いざなぎのみこと・男神)ともに天津神(あまつかみ)の命で淤能碁呂島(おのごろじま)を作って天降り、国生みと神生みを行った。大日本豊秋津洲(おおやまととよあきづしま)を初めとする大屋島国を生んだ後、イザナミは火神を生んで死に、黄泉国(よもつくに)を支配する黄泉大神となる。イザナギが黄泉国から逃げ帰って汚穢(けがれ)を禊(みそぎ)した際に、天照大神(あまてらすおおみかみ)・月読命(つきよみのみこと)・素戔嗚尊(すさのおのみこと)などの神が生じた。

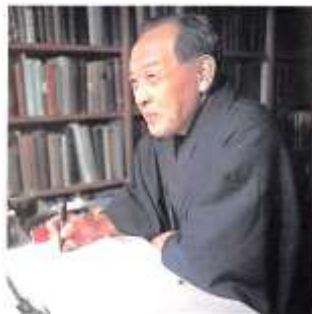
「デジタル大辞泉」&「世界大百科事典」



著者紹介・深田久弥

ふかだ きゅうや、1903-1971。石川県大聖寺町（現在の加賀市）生まれの小説家（随筆家）及び登山家。俳号は九山。山をこよなく愛し、読売文学賞を受賞した『日本百名山』は、特によく知られている。

同郷の中谷宇吉郎は幼稚園、小学校、大学で先輩になる。また知人に中島敦がおり、その遺稿から『李陵』を発見、深田が題名を付した。



1903（明治36）年3月11日、石川県江沼郡大聖寺町字中町に生まれる。代々紙商と印刷業を営む深田屋の6人兄弟の長男。

1915（大正3）年、富士写ヶ岳（標高942m）。加賀市南西部、福井県境に近く、地元の多くの小中学校の遠足コースでもある山。これがきっかけで登山に興味を持った、と後に自著で述懐。1918（大正7）年、旧制福井中学（現・福井県立藤島高等学校）の時友人と2人で白山登頂、山岳開眼。

青字は主な登山の経歴
赤字は山関係の出版活動など

1922（大正11）年、第一高等学校に進み、文芸部で堀辰雄や高見順と知り合う。またボートや柔道と並んで、山岳部員として山にも親しむ（田部重治『日本アルプスと秩父順礼』など愛読）。夏、槍ヶ岳、浅間山。秋、金峰山。翌年7月、白馬岳。1925（大正14）年5月、苗場山。

1926（大正15）年、東京帝国大学文学部哲学科1年生。重いテントを背負い、朝日連峰を縦走、朝日岳。友人と2人でテントを背負い、薬師岳、赤城山。秋、至仏山。

1927（昭和2）年、大学に在籍しつつ当時円本ブームに沸いていた改造社に入社。翌々年、最初の結婚。1930（昭和5）年、『オロッコの娘』などの小説を発表、これらの作品が好評だったことに勇気を得て大学を中退、勤めも辞めて文筆一本の生活に入る。

1932（昭和7）年、鎌倉に転居、以後、山やスキーの文章が多くなり、文学作品も充実。秋、友人と3人で鳳凰山。1933（昭和8）年秋、谷川岳。1934（昭和9）年夏、友人と2人で鹿島槍ヶ岳。12月、初めての山の紀行随想集『わが山山』（改造社）発行。

1935（昭和10）年、日本山岳会に入会。

1936（昭和11）年4月、巻機山。6月中旬、会津駒ヶ岳。

1937（昭和 12）年、『山岳展望』（三省堂）発行。1939（昭和 14）年 12 月、霧島山。宮之浦岳（18 年後再登頂）。

1940（昭和 15）年 3 月、雑誌「山小屋」に「日本百名山」連載、10 回 20 座で中断。12 月、『山の幸』（青木書店）発行。

1942（昭和 17）年 5 月中旬、八ヶ岳。7 月、『山頂山麓』（青木書店）発行。8 月、男体山。10 月中旬、石鎚山。

1944（昭和 19）年、召集され中国大陸に出征。隊内で俳句を盛んに行い、また人情少尉として敬慕されたという。

1946（昭和 21）年、復員。2 度目の結婚相手と越後湯沢に暮らす。1947（昭和 22）年夏、岩木山。郷里大聖寺に移り、句会を主宰などするうち次第に地方名士に。

1949（昭和 24）年、錦城山岳会を結成し、理事となる。剣岳、穂高岳など本格的登山再開。

1952（昭和 27）年、後立山連峰縦走、五竜岳。5 月、『をちこちの山』（山と溪谷社）発行。夏、友人と 2 人で光岳。秋、1 人で蓼科山。国体山岳部門監督として鳥海山へ。

1955（昭和 30）年、東京世田谷に転居。翌年、『ヒマラヤー山と人』（中央公論社）。翌々年、『ヒマラヤ登攀史—8 キメートルの山々』（岩波新書）。10 月、夫人を含む 5 人で雨飾山に 3 度目の挑戦で登頂の折、帰宿が遅くなりあわや遭難騒ぎに。

1958（昭和 33）年、ヒマラヤ探査へ。成果として『雲の上の道』『氷河への旅』（共著）など。

1959（昭和 34）年、家族 3 人で斜里岳。雄阿寒岳（雌阿寒岳は火山活動中で登山禁止）。山岳雑誌「山と高原」（朋文堂）で「日本百名山」の連載を始める。1963（昭和 38）年にかけて、毎月 2 山の連載を 50 回。

1960（昭和 35）年 4 月、恵那山、富士見台高原。9 月、本小屋（九山山房）完成、ヒマラヤ塾の観を呈する。（～1973 年）。

1964（昭和 39）年 6 月、『ヒマラヤの高峰』（雪華社）刊行開始。7 月、連載を推敲して新潮社から『日本百名山』を出版。

1965（昭和 40）年、『日本百名山』で第 16 回読売文学賞（評論・伝記賞）を受賞、人気作家に返り咲く。

1966（昭和 41）年、約 4 か月中央アジアを旅行し、その後紀行探検記を著わす。

1968（昭和 43）年、日本山岳会副会長に就任。

1969（昭和 44）年、山溪賞（山と溪谷社）を受賞。

1971（昭和 46）年 3 月 21 日、茅ヶ岳（1704m）登山中、山頂直下で脳卒中により死去、68 歳。その場所には、「深田久弥先生終焉の地」と表記された石碑が建つ。

死後のあれこれ

1974（昭和 49）年 4 月、加賀市大聖寺町江沼神社境内に、深田久弥文学碑建立。深田クラブ発足。翌年、加賀市名誉市民。

1981（昭和 56）年 4 月、葦崎市観光協会が茅ヶ岳の登山口に深田久弥記念公園を開設。顕彰碑には「百の頂に／百の喜びあり」と記されている。翌年から、毎年 4 月の第 3 日曜日に「深田祭」を開催。

1993（平成 5）年 11 月、深田久弥の生家前に、大聖寺観光協会により「深田久弥誕生の地」の石碑。1996（平成 8）年 3 月、加賀市山岳協会と大聖寺文化協会が中心となり「深田久弥を愛する会」結成。2002（平成 14）年 12 月、加賀市大聖寺に「深田久弥 山の文学館」がオープン。翌年 7 月、生誕 100 年の白山の山開きの日に、『山を愛した文学者深田久弥 生誕 100 年（北陸石川）』の北陸ふるさと切手発売。

日本百名山のその後

1964（昭和 39）年『日本百名山』出版。1978（昭和 53）年に、日本山岳会のメンバーが新たに選んだ 200 山を追加する形で「日本 300 名山」を選定。日本百名山を完登し深田久弥の精神を受け継ぐ「深田クラブ」の会（1974（昭和 49）年発足）が会員内で吟味した結果、1987（昭和 52）年、日本百名山に 100 山を追加する形で（300 名山に含まれない荒沢岳を追加し山上ヶ岳を除外）『日本二百名山』を出版。1994（平成 6）年から NHK の BS2 のテレビ番組『日本百名山』シリーズで全山が紹介され、以後多くの登山ガイドの本、ビデオ、DVD が出版されている。

山の作家としての深田久弥研究におすすめの資料

深田久弥『きたぐに』（東京美術、昭和 45 年）

深田久弥追悼委員会『深田久弥の追憶』（昭和 46 年）

深田久弥文学碑建立委員会『深田久弥の幼少年時代』（昭和 49 年）

『人物書誌大系 14 深田久弥』（日外アソシエーツ、1986 年）

深田クラブ編『深田久弥の研究 読み、歩き、書いた』（新ハイキング社、平成 11 年）

田澤拓也『百名山の人 深田久弥伝』（TBS ブリタニカ、2002 年）

高辻謙輔『日本百名山と深田久弥』（白山書房、2002 年）



両毛線沿線、小さな旅
～太平山神社より晃石山を越えて岩舟山へ～
2月11日（火） 天気・はれ

立春を過ぎての大雪から3日目、雪はまだ方々に残り、電車の窓から見渡すのは雪原、登山道も半分以上が雪道で、子ども4人を含む一行9名、低山ながら雪山歩きを満喫した1日でした。

古風なボンネットバスも走る栃木駅からバスに乗り、終点の國學院前で降りて、校舎が展開する斜面のすぐそばに山門を開く太山寺（たいさんじ）へまず寄り道。本堂前に冬枯れのしだれ桜（樹齢360年!）の大木が鎮座しています。解けかけて凍結した残雪の路面に用心しながら歩き始め、最初の石の鳥居をくぐると、複雑な形の屋根の六角堂の脇には小さなかまくらが。雪に覆われた「あじさい坂」の長い石段を登り始めます。日当たりのよい場所ではもう緑の芽が膨らんでいました。花の名所と聞きますが、真冬でもロウバイとユズの実の黄、ツバキの赤の彩りが雪に映えます。

赤い隨身門からの急な石段の雪は消えていました（日当たりが良いからか、除雪のおかげか）。さらに階段を登りつめ、太平山神社の境内へ。本殿周辺には八百万（やおよろず）の神様がずらりと祀られています。少し離れた展望台からは、広々とした栃木の平野と、それを遠巻きに囲む山々がはるかに見渡せます。

神社の脇からいよいよ山道に入りました。道は、吹き溜まりのように深く雪に覆われていたり、地面がまだらに見えていたり、解けた雪が凍って滑りそうだったり、ぬかるんだ日なた道や、またすっかり乾いた地面だったり、実に様々です。神社の奥宮の小さな祠を拝み、ほどなく太平山頂、木々の間から望む晃石山を目指してさらに歩き続けます。雪原に大きなグミの木が1本、その名もぐみのき峠でひと休み、ここから降りて行く大中寺周辺の里の風景が見下ろせます。連なるハウスはブドウ畑とのこと。登り下りを何回か繰り返してやっと晃石山（てるいしさん、標高419m）山頂に辿り着きました。ここで楽しみの昼ごはん。こんな雪道の中でも意外と大勢の登山者がいて、すれ違ったり追い抜かれたり、山談議に花が咲いたりします。一等三角点もしっかり確認。山頂下の晃石神社境内には、さらに大勢の登山者が休息を取っていました。

難路歩きでもあったので、当初の予定の馬不入山は見送り、途中の桜峠から降りることになりました。清水寺の前に出た後、旧東山道という里山のなだらかな道を、登ってきた山々を見上げながら JR 大平下駅目指して歩きます。七不思議で有名な大中寺も今回は見送りました。

1時間に1本のJR 両毛線をひと駅乗り、栃木で東武線に乗り換えて帰途に。

今回訪れた太平山周辺はブドウ栽培のメッカですが、その後再び大雪に見舞われて、ハウスなどに大きな被害が出たとのこと。お見舞い申し上げます。

(北光クラブニュースNo.136 掲載)

※ 参加者

小川知峻・裕月・真司・恵美、佐々木伸二、
平井亜湖、石崎裕子、阿部良司・みゆき
(計9名)



晃石山山頂にて

※ 見た植物(50音順)

(咲いていた木の花、いずれも植栽) ウメ、
サザンカ、ロウバイ、

(常緑樹) アオキ、アカマツ、アラカシ、イヌガヤ、イヌツゲ、コブシ、サカキ、
シキミ、シロダモ、シラカシ、スギ、ツゲ、ツルグミ、ヒサカキ、ヒノキ、メギ、
ヤブコウジ、ヤブツバキ、ヤマツツジ、ユズリハ、

(葉の落ちていた木) アオダモ、アオハダ、アカシデ、アカメガシワ、
イタヤカエデ、ウリカエデ、エゴノキ、クヌギ、クマシデ、グミ、ケヤキ、
コアジサイ、コウヤボウキ、コクサギ、コゴメウツギ、コナラ、スイカズラ、
タカオモミジ、チドリノキ、ツノハシバミ、ニガイチゴ、ネジキ、ミズキ、
ムラサキシキブ、メギ、ヤマザクラ、リョウブ、

(常緑のつる植物) キツタ、テイカカズラ、ビナンカズラ

※ 聞こえた鳥

エナガ、カケス、コゲラ、コジュケイ、シジュウカラ、スズメ、ツグミ、
ヒヨドリ、メジロ

❁ 太平山・雪中行軍の風景



東武線車窓から雪原の彼方
日光の山並が一望！



栃木駅前を往来する
ボンネットバス



太山寺山門（上）と
境内のしだれ桜（下）



足元に注意！
こんな道を歩き始める



雪の参道（上）と
雪のない参道（下）



太平山神社
←隨身門



太平山神社境内（上）
栃木市内を一望！（下）



晃石山頂（上）で昼食



恒例の「焼きソーセージをどうぞ！」



山を下りれば旧東山道の
のどかな里山歩き

J R大平下で両毛線に乗る
栃木までたったひと駅でも
「テツ」には貴重なひと駅



自然観察クラブ 2014年度 行事予定

- 4月6日 東京 小下沢より景信山、高尾山ハイキング
(薬王院参詣、帰りはケーブルカー等利用)
- 4月20日西大芦 長安寺より羽賀場山、お天気山ハイキング(1等三角点のある山)
- 5月3日 東京 御岳山より日ノ出山、養沢鍾乳洞へ
(JR青梅線・五日市線、西東京バス、ケーブルカー利用)
- 5月18日日光 史跡探勝路(滝尾古道)と黒岩尾根ハイキング
(日光山輪王寺宝物殿、3仏堂、養源院跡、開山堂、石鳥居、滝尾神社、行者堂、殺生禁断碑、稚児ガ墓)
- 6月 日光 太郎山ハイキング
- 7月 栗山 田代山ハイキング
- 8月 北光サマースクール・昆虫観察
北光サマースクール・魚類観察
- 9月 那須 茶臼岳登山と旧黒田原駅舎見学(日本百名山、ロープウェイ利用)
- 10月 日光 歌ヶ浜より茶ノ木平、半月山ハイキング(立木観音参詣)
- 11月 黒羽 萬蔵山ハイキング(那須神社、大雄寺参詣)
- 12月 芳賀 真岡鐵道七井駅より芳賀富士を越えて茂木駅へ
(真岡鐵道SL乗車、安楽寺参詣)
- 1月 今市 東武大谷向駅より茶臼山を越えて毘沙門山へ(東武電車利用)
- 2月 田沼 唐沢山より諏訪岳ハイキング(唐沢山神社、唐沢城跡、村檜神社)
- 3月 東京 陣場山より小仏峠～高尾駅(小仏関所の史跡探訪)



自然観察クラブ 会費納入のお願い

- ☆ 年会費(個人または家族) 1,800円
// (会報不要の方) 600円

※ 会報はインターネットでご覧になれます。

☆ 会報の主な用途

会報発行・発送用諸経費(郵送料、封筒・印刷用紙、インク代等)、
プリンター保守費用、臨時催事の通信、その他

☞ 読者との往復書簡 ☜

山岳雑誌蒐集事始（阿部良司→白坂正治氏）

立春を迎え、時に暖かな日もめぐってくるようになりました。いかがお過ごしですか。昨年は本会への厚いご指導ご協力ありがとうございました。今のところ白坂さんだけではありませんが、すばらしい出会いがあったことに、改めて小誌を創刊したことの成果とインターネットのすごさを感じるものです。

とはいえ、白坂さんとは実はもっと以前から、かすかなつながりがあったと信じています。それは穂高書房を通じてです。私が初めて穂高書房に行ったのは1977年から1980年の間であったはずです。夜間の大学に入学して山岳部を探したのですが所在がつかめず、止むを得ず独りで山登りをしようと思いました。ガイドブック代わりに「山と溪谷」のバックナンバーを集め始めたのですが、そのうち山岳雑誌を集めること自体がおもしろくなってきました。

中央線沿線の古書店ガイドを見ながら、阿佐ヶ谷のある古書店を訪ねて行った時のことです。駅前にはそのころ佐伯書房という古書店があって、そこでも山溪の戦前のものを譲ってもらったものです。その日はJR線に沿った道を古書店ガイドに載っているもう一軒の古書店を訪ねて行ったのですがその日は休みでした。しかたなくその道をそのまますすぐ、ぶらぶら歩いて行くと、目の前に「山岳書専門 穂高書房」という看板が見えました。私は自分の目を疑いました。「夢じゃないか」と。店の中に入ると、山溪の戦争直後の小さな版がずらりと並んでいました。お客さんが一人いて、「山溪のあの小さな版がうちにもあるから今度持ってくるよ。」と言っていました。あとで聞くとそれは横山厚夫さん（注・『山書の森へ』などの著者）だったようです。あの時、たぶん和久井さん（注・穂高書房店主）は店を開いて間もない時だったんじゃないでしょうか。

また、これは十数年前のことだったと思うのですが、穂高書房の店の左奥にまとまってあった田部先生の著書を見ていると、「田部先生に熱心なお客さんがいて毎週のように来るんだ。田部重治に関するものならなんでも、と言うので探してあげる。」と言っていました。それは白坂さんのことのようにです。先日、水野勉さん（注・『登山家素描』などの著者）の本のことで電話があったので白坂さんのことを話すと、「彼は中学生の時、僕が店を開いた頃から来るよ。」という話でした。昨年知り合った方に昔話をする、というもおかし



なものです。

昨年5月号で田部重治先生を取り上げたのは、本会の性格から、旅に関する文章が欲しかったからです。考えてみると、田部先生の著書ほど書名に「山旅」を含め、旅という字の多い著者はいないですね。今後も折にふれ、「旅」について書いている文章を探し、また取り上げてみたいと思います。

ところで1月号は尾崎喜八を取り上げました。もちろん、それは尾崎先生が自然に造詣が深く、また山や旅についても書かれているからです。まあ、尾崎先生の著書も田部先生と同様、気の遠くなるほど多いようだし、ネットで調べればすぐ出てくる。自分の持っていない本の書名ばかり並べてもおもしろくない。そこで今回は山岳雑誌に掲載された尾崎先生の著作、それもあまりにも膨大なので各山岳雑誌に初登場の著作を調べて見ました。これらの多くは後に単行本に収められているのだと思いますが、雑誌でしか見られない作品も時にはあるようです。

山と溪谷社よりかつて発行されていた雑誌「ハイカー」に「町田立穂対談」というコーナーがあって、毎月著名な登山家などが登場しています。残念ながら尾崎先生は登場していませんが、第24号(昭和32年10月号)で田部先生が登場し、町田立穂氏と対談しています。山と溪谷社と田部先生は「山と溪谷」の創刊当初からつながりがあるので当然ではありますが、この号以降、田部先生は度々、「ハイカー」に寄稿されているようです。

田部重治研究会ではすでに雑誌に掲載された著作についても網羅されているのだと思いますが、著名な登山家それぞれの著書目録にとどまらず、各種山岳雑誌に掲載された文章を含めた著作目録をまとめてみるのもおもしろそうですね。

今年もおたよりをお待ちしております。また文学、山、旅に関する投稿もお願いいたします。そういえば穂高書房から電話があった時、田部重治研究会の会報についてきいたら、今揃いであるよ、と言うので送っていただきました。読書感想文も苦手なのですが、「鶴のやうに」にいつか投稿できるようになりたいものです。また和久井さんから「田部重治資料館」の構想のことを聞きました。陰ながら実現を祈念しております。微力ながら協力できることがあれば、と思います。

阿部 良司

2014年2月8日 雪深き日に

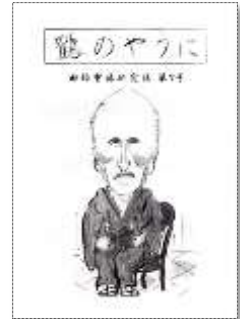
白坂正治様

御手紙有難く読ませて頂きました。御縁の不思議なすばらしさにうたれております。
『鶴のやうに』（所蔵誌に加えて下さった由、深謝申し上げます）の巻頭言の通り、
十二歳の夏の感動が半年後位には和久井さんとの出会いをもたらし、昭和の終わ
りには同志を得て、2002年には研究会を発足させることになるまでは、自分自身
でも思っておりませんでした。高まる熱情が、田部先生の情報を限りなく幅広く追
求めさせ、阿部様に辿りついてくれたのだと喜んでます。

目録に関しましては、他ならぬ和久井さんからも勧められて
いるのですが、「書影目録」作成の希望は持っています。
「目録」——「館」となっていけばベスト、鶴のはばたき具合、
方向によるかもしれません。

週末はまた雪とか。御自愛くださいませ。

2014年2月12日



※ 白坂氏には会報をお送りするたびお礼状をいただいています。編集者には大いなる励みです。
皆様の投稿をお待ちしています。



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第22号

2014年3月発行

北光・自然観察クラブ

鹿沼市戸張町1818

（クリーニングハウスあべ内）

発行人 阿部 良司

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

検索